

中長期目標	○未来に向かい 自分らしく輝き 豊かに生きる子どもの育成	今年度の重点目標	○自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 ○質の高い職員集団の実現 ○安全で安心な学校の実現 ○「チームくらよう」の推進
-------	------------------------------	----------	--

評価項目	部	年 度 当 初			評 価 結 果 ()月			
		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度への改善方策
自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成	A 部門	○子どもたちが主体的に学習に取り組み、一人一人の方法で表現する力を育む授業づくり	○ルーティーンになっている流れで見通しを持って生活・学習することができている。 ○関わりの多い教職員だけでなく、普段、関わりの少ない支援者からの働きかけにも個々の方法で答えることのできる姿が増えてきているが、さらに「いつでも、どこでも、誰とでも」コミュニケーションをとることができるよう、それぞれの対応力、表現力を高めていく必要がある。	○様々な学習活動を通して、児童生徒が主体的に取り組み、一人一人の方法でいろいろな人に気持ちを伝えたり、表現したり、関わろうとしたりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	○児童生徒が主体的に取り組む姿についての研修会を開催する。 ○児童生徒が主体的に取り組む姿とはどのような姿なのか、学部で共通理解し授業づくりに向かう。また、教職員間で効果的な授業づくりについての情報共有を行う。 ○関わりの多い指導者との関係性でできていることを、「いつでも、どこでも、誰とでも」できる力へとつなげていくことができる活動、有効な支援ツールや教材・教具等について情報共有する。			
	B 小学部	○主体的に活動したり表現したりする姿へ繋げる指導・支援の工夫	○児童の達成感や主体的に活動する意欲・姿を育むため、教育活動全般を通して、様々なアセスメントからの児童の実態把握や情報共有を行い、発達段階に応じた表出や表現できる学びの場を作っていく必要がある。	○児童が学校生活場面(学習生活の中で、自分で伝えたいことや表現したいことを、主体的に自分なりの方法で表出したり表現したりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	○担任だけではなく、教員間でも児童の実態や目指す姿や、そこに向かう段階を共有(授業計画で、グループ会で、日常のコミュニケーションで、等)し、学習内容や指導・支援方法を検討して、評価・改善を行っていく。 ○児童の表出力や表現力を広げるために、有効な支援ツールや教材・教具の情報共有を図る。 ○児童、保護者のニーズをしっかりとキャッチすると同時に、学校生活での様子や学習の広がりについて、保護者や関係機関と共有し、連携を取っていくことを継続する。			
	B 中学部	○表現力の育成を目指した授業の充実	○昨年度、伝え方や言葉遣い等に課題が見られ、生徒同士のトラブルにつながることもあったが、指導者が速やかに対応したことで、よりよい関わり方を知ったり改善しようという姿勢が見られるようになった。 ○新年度になり、教師や友だちとの関係や学習環境が変化したことにより、自分から気持ちが伝えにくい姿も見られる。	○相手を意識した伝え方を身につけ、自分の気持ちや思いを伝えることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答 ※生徒アンケートや学習の記録から評価	○身につけた力を様々な学習場面で活用できるように、学習活動全体を通して、自己表現やよりよい人間関係づくりを目指した活動内容の設定や共通した支援を行う。 ○安心して自分を表現することができるよう、生徒と指導者、生徒同士の関係づくりを行う。 ○生徒の実態把握や授業づくり、支援などのうまくいった事例や改善策などを、学習グループや学部内で情報共有する。			

様式 3

B 高等部	○周りの人とやりとりをする中で、自分の意思や、なぜそう考えたかを相手に伝えることができる生徒の育成	昨年度、ICT機器を利用した学びを通して、やりとりができる生徒の育成に取り組んだ。単一障がい学級の生徒においては、ICT機器を利用して、興味があることやわからないことを自分から進んで調べたり、自分の考えをまとめて相手に伝わるようにプレゼンを作成し、発表することができた。また、質問、意見など、周りの友だちとのやりとりが増えた。重複障がい学級の生徒においては、ビデオで自分の姿を観て、即時にふりかえることで、がんばったことや、次にがんばりたいことをより意識して、選択、発表することができた。	①周りの人とやりとりをする中で、自分の意思を相手に伝えることができる。 ②周りの人とやりとりをする中で、なぜそう考えたのか、自分の考え方を相手に伝えることができる。 『意思、考え』→結論 『考え方』→結論に至るまでの過程(どう考えたか) アンケートを実施し、①②とも70%以上の指導者ができたと回答したらA、一つでも、できたが70%であればB、両方ともできが70%以下であればC評価とする。	○昨年度取り組んだICT活用のよさを活かした授業の中で、指導者もしくは、生徒同士のやりとりを活発に行う。 ○まずは指導者が、生徒とのやりとりの中で、意思を聴いて終わりではなく、なぜそう思ったのか(なぜそう考えたのか)を生徒と問答するようにする。そして、生徒の考え方を整理し、○○だから(理由)、××の考えを選んだ(結論)と、話すことができるようにする。 ○キーノートなどのスライド作りやワークシートを利用して、考え方の過程を可視化しながら、ふりかえることができるようにする。			

年 度 当 初		現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策				
質の高い 教職員集 団の実現	研究部	○児童生徒が主体的・対話的になるような授業づくり	○授業公開を通して、表現力向上をめざした授業の工夫を知ることができた。他学部の授業を見る機会を得られたこと、良い点を知ること、伝えることができたことは、発表者にとっても参観者にとっても実りある研究となった。今年度は、良いところだけでなく、建設的なやりとりにより改善点等も話し合うことができるような授業公開としたい。	○授業づくりを通して、児童生徒の表現力を向上することができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○授業者が実態・目標・授業の工夫がわかるシートを準備する。 ○授業者と参観者が授業について建設的に話し合うことができる「授業公開」となるような場を設定し、負担なく、いつもの授業をPDCAサイクルでできる土台となるものとすることを強調して教職員に伝える。			
	教務部	○児童生徒の学習状況をより客観的に評価できる規準の作成 ○教育水準の維持向上と働き方改革を兼ねた諸帳簿の整理	○児童生徒の実態に応じた教育課程の編成が年次で行われている。 ○指導に際して、学習の立案は必要項目となっているが、評価への意識の定着が薄い。しかしながら多忙な毎日に評価までは手がつかないようにも感じている。 ○指導者が作成する諸帳簿に関して、学校のオリジナルのもので展開している。	○よりスリムな評価のシステムを構築を目指して、各教科の学習を評価する際の規準を校内で作成する。 ○新しい形の個別の指導計画への移行を年度内に行う。	○学習部の先生を中心にして、作業をすすめる。より同じ意識で作業に取りかかることができるように教務部として研修を企画・運営を行う。 ○他校の書式等を参考にしながら、国や県の動向を踏まえた書式かつ業務の削減につながるものに仕上げていく。			
	全体	○時間外業務の原因把握と業務カイゼンの推進	○個々の業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。 ○前年度比で月45時間、年間360時間を超えて時間外勤務をする実態がある。	○日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していく。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業ダイの設定し、早期退勤への意識を高めるとともに計画的に勤務をする環境を整え。勤務簿の自己管理の徹底を図る。 ○業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けての意欲を高めるとともに自ら考えた改善策を学校全体具現化に取り組む。			

様式 3

	事務部	○事務の効率化と「チーム事務室」の推進	○事務室内で協力し合いながら業務を行っているが、担当者以外が対応できないこともあり、不在の場合対応が遅れることがある。	○各自の業務がわかりやすく整理され、保護者や業者への対応、職員からの相談についての初期対応が担当者以外でもできる。	○各自が担当業務について改善できる点を見つけ実践する。担当者以外でも対応できるようDB等を使ってマニュアル化する。		
	健康教育部	○児童生徒の健康増進に向けた学習の充実と環境整備	○新型コロナウイルス感染症も5類に移行し、児童生徒の健康に関する課題も変化しつつある。コロナ過において給食指導やはみがき指導が不十分になり、歯肉炎の生徒が全校で約15パーセントいる。また黙食の徹底により、給食中の指導もできず、食育も行き届いていない。さらには、保健体育の学習においてもマスクの着用、非接触等、制限のある学習が多く、運動の機会が減少している。	○歯肉炎の予防に向けてはみがき指導の充実が行われている。 ○肥満傾向の生徒の割合が減少傾向に向かっている。 ○性に関する指導や児童生徒の健康増進に向けた学習の教材が整理され、指導者一人一人が保健指導において「おおむねできた」と回答できた割合が8割を達成している。	○全国小学生はみがき大会の活用や、性に関する指導、日常生活の指導部、保健体育部等、複数の学習部と連携する。 ○児童生徒の健康への意識の向上や指導者の学習に向けて意識の向上につながるよう外部講師を活用する。		
安全で安心な学校の実現	安全・環境部	○安全・安心への意識と体制作り	○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○地震、火事、不審者などの避難訓練の方法や緊急時に使用する機器の扱い等に課題が上っている。	○児童生徒が安全・安心な環境で学習できるよう避難訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有、課題への対応を適切に行っている。	○安全点検を適切に行い、事務部への報告を行う。 ○安全・安心への意識を高める体制作りを行うことができるように、避難訓練の方法などを検討・見直しをしながら計画、実施する。		
	安全・環境部	○より安全・安心な教育環境	○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の校内外の環境が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っているが、エコについての取り組みがクラスによって差がある。特に、水道、紙の使用量が増えている。点検内容を見直したので、結果を見て呼びかけを行っている。	○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まる。 ※職員作業の実施(年2回) ※掃除道具点検の実施(年2回) ※水道・電気の使用量で、昨年度との比較を周知する。 ※エコ点検で◎の割合が6割以上	○年に2回の職員作業を計画実施し、安全安心で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に関してエコにつながる具体的な取り組みを示すとともに、掲示板にTEAS報告を載せ、全校への意識づけを行ったり、職員への協力を呼びかけたりする。		

様式 3

評価項目	部	評価の具体項目	年度 当初			評価結果 ()月		
			現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度への改善方策
「チームく らよう」の 推進	情報教育部	<ul style="list-style-type: none"> ○本校教育についての理解啓発につながり、指導支援の連携を密にしていくための教育活動の発信 ○児童生徒の端末の活用促進 ○ICTを活用した効率的な業務改善 	<ul style="list-style-type: none"> ○定期的に学校ホームページで教育活動について発信しより分かりやすいものとなってきたが、効率的な利用ができていない。 ○指導者用端末や児童生徒の1人1台端末整備の遅れがあるためICT活用による学習活動が十分に実施できていない。 ○ペーパーレス化が徐々に進んできたが、教職員のICTリテラシーの差があったり、トラブルへの対処などの問題があったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校ホームページによる情報発信の充実を図るとともに、必要な書類がダウンロードできるようにするなど利便性を高める。 ○児童生徒の1人1台端末を活用とともにペーパー教材の他にデジタル教材を取り入れ、学校と家庭の連続的な学びができるよう効果的なICT活用の充実を段階的に図る。 ○教職員のフォローアップ研修や個別支援を継続しながら、学校全体としてICT活用による効率的な業務改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○くらようダイアリーの定期的な更新をする。また、学校ホームページの内容やデザインレイアウト等リニューアルを行う。 ○ICT活用を効果的に生かした授業ができるよう研修を通してデジタル教材やその活用方法についての実践事例の紹介を行う。 ○ICT活用の教職員研修や個別のフォローアップやともに1人1台端末の利用の日常化に取り組む。各分掌業務の中でアンケートを実施する場合はGoogleフォームで行うよう呼びかけるなど啓発を行う。 			
	支援部(校内)	<ul style="list-style-type: none"> ○適切な就学支援に向けた校内体制の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒の実態の多種多様化、児童生徒を取り巻く環境の変化等に加え、総合的な視点で検討される就学支援の考え方により、児童生徒にとって適切な学びの場の検討をすることが複雑化してきている。就学に関して、職員全体で共通理解をしたり校内体制を整えたりしていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○就学に関する判断基準を再度全職員で共通理解をし、一貫した視点で実態把握や検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○まずは、担当者を中心に支援部内で就学に関する情報を収集したり共通理解を図ったりする。 ○委員会や就学支援委員会、学部会等を活用し、就学に関する情報を校内で周知する。 ○校内就学支援委員会や体験入学・体験学習等で、就学支援の視点が生かされているかどうか、PDCAサイクルで確認する。 			
	支援部(地域)	<ul style="list-style-type: none"> ○教育相談の充実による適切な就学支援の促進 	<ul style="list-style-type: none"> ○センター的機能の活用により、就学に関する情報を園や学校に提供したり、幼児児童生徒への指導・支援について相談業務に対応したりした。今後も継続して活動し特別支援教育の充実を図ることで、学びの場の選択肢が広がっていくようにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教育相談や体験入学・体験学習等で、園や学校、保護者の方に就学や指導・支援に関する情報提供等を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○それぞれの学びの場のメリット・デメリットを整理して伝えることで、園や学校、保護者の方の検討材料になるようにする。 ○教育的ニーズを把握し、実践につながりやすいように、具体例を挙げながら指導・支援方法について伝える。 ○コーディネーターを中心に、支援部や校内資源を活用しながら、教育相談に対応する。 			
	キャリア教育部	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者への情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ○集合型の中部福祉セミナーを5年ぶりに開催できるように準備を進めている。また、先輩保護者から直接話を聞く座談会式研修会の準備を進めている。人権教育・交流や進路に関する保護者への情報提供の充実をさらに図る必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者アンケートで5割以上が「研修会やセミナーに参加したり、キャリア教育だより等を読んだりして、進路や人権教育・交流に関する情報を得ることができた。」と回答する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○中部福祉セミナーの開催 ○先輩保護者に学ぶ会(座談会)の開催 ○保護者対象視察研修の実施 ○保護者対象人権教育研修会の開催 ○キャリア教育だよりの発行 			